＜論文＞

ゴフマンの「隠れジンメリアン」疑惑
―従来のゴフマン理解の見直し―

薄　井　　明*

抄　録：アーヴィング・ゴフマンは最晩年のインタビューでエミール・デュルケムとＡ・Ｒ・ラドクリフ＝ブラウンが自分に影響を与えた主要な人物であると率直に認めている一方で、ゲオルク・ジンメルの影響の点に関しては黙して語っていない。筆者には、ジンメルについてゴフマンが沈黙していることが「謎」に思われる。というのも、ゴフマンはPh. D. 論文のエピグラフとしてジンメルの社会学的著作から長い一節を引用していたり、デュルケムと同じくらい多くジンメルから引用しているからである。この「謎」を解くために、筆者は「ゴフマンは隠れジンメリアンであった」という仮説、すなわち「ジンメル社会学のゴフマン相互行為秩序論への影響は見かけ以上にはるかに深く広範囲に及んでいた」という仮説を提出して検証する。この仮説に基づいて、筆者はゴフマンの最初の公刊論文を取り上げ、ジンメルの著作がゴフマン社会学に実質的にどのような影響を与えたのかを解明する。

キーワード：ゴフマン社会学、ジンメル社会学、隠れジンメリアン

１．序―問題提起

現代の代表的なゴフマン研究者の一人であるＧ・スミス（Gregory W. H. Smith）は、社会学理論の系譜におけるゴフマン社会学の位置づけに関して「ゴフマンはゲオルク・ジンメルとエミール・デュルケムの第三世代に当たる」（Smith 2006：31）と述べている。ジンメルとデュルケム双方からの影響があったという含意であるが、特にジンメル社会学のゴフマンへの影響に絞ると、一般に以下のような指摘がなされることが多い。

> 「パークがドイツ留学時代にジンメルから教えを受けたことは知られているが、ヒューズはそれを受け継ぎ、ジンメルの紹介につとめるとともに、彼の著作のなかにはジンメルの思考法が生かされている。さらにジンメルへの関心は、ゴフマンを代表として弟子たちの世代にも受け継がれたのである」（野田　2003：275）

ゴフマンが1945年に入学したシカゴ大学院でジンメル社会学の影響が強かったのであれば、確かに、ジンメルからゴフマンへの知的影響に関する上のような記述は、違和感なく受け入れられる。しかし、スミスは別の論文でジンメル社会学とゴフマン社会学の関係の識別しにくさとその理由について次のように述べている。

> 「ゴフマンの著作とジンメルとの関係がはっきりと見える形になっていないさらに深い理由は、ジンメルが死の直前に自らの日記に書き込んだ一節に見出せる。その中でジンメルは自分の知的影響を現金の形で残された遺産に喩えている。現金の遺産はその受取人の手によって容易に別の物に変換されるために元々何であったかわからなくなってしまうということだ。」（Smith 1989b： 19）［傍点は引用者］

スミスはここで「ジンメル社会学のゴフマン社会学への影響はあるだろうけれども、その関係はわかりにくい。その要因は、主にジンメルの側にある」という主旨の発言をしているのである。

ゴフマンの、社会学上のもう一人の知的先達とされるデュルケムに関しては、現在では既定事項とされるが、両者の関係も当初はわかりにくかった。その関係を解明したとされるＲ・コリンズ（Randall Collins）は、両者の関係がわかりにくかった原因を、デュルケムの側にで

＊大学教育開発センター

はなく、“相続人”の側に帰しながら、ゴフマンの死後、彼の学術的なキャリアに関して辛辣にこう述べている。

「ゴフマンが独創的な思想家ではあったことは確かだが、実際以上に独創的にみえるように彼はうまくやってのけたのである。それは、彼が自分の足跡を消し去る達人だったからである。」（Collins 1986：109）

その証拠としてコリンズは次の事例を挙げている。

「ゴフマンは部内者だけにわかるような秘教的な書き方をしている。すなわち、彼が言っている内容や彼が反論している相手を認識するためには、彼が語っている知的環境を前もって知っていなければならないのである。このことが、私がデュルケム派の社会人類学として描いたゴフマンの初期の著作がそのように認識されてこなかった理由である。デュルケムやイギリスの人類学者にときたま言及することはあったが、その言及はいつも短く、他の事柄に埋もれていたのである。」（*ibid.*：108-109）

これらの指摘はこの時点では正しかったといえるが、結果的にゴフマン自身によって覆されてしまった。晩年のインタビューで彼はこう語っていたのである。

「私に影響を与えた主要な人物は、ウォーナー、ラドクリフ＝ブラウン、デュルケム、そしてヒューズであった。ウェーバーもまたそうかもしれない。」（Verhoeven［1993］2000：218）［傍点は引用者］

こうしてみると、コリンズの指摘が妥当するのは、むしろジンメルのケースだと思われる。晩年のインタビューでデュルケムやラドクリフ＝ブラウンの影響を率直に認め、引用がごく少ないマックス・ウェーバーの影響にさえ言及しているゴフマンが、デュルケムに準じて引用・言及が多いジンメルの影響については全く語っていないからである。同じインタビューでゴフマンは、シカゴ大学院時代を回想して次のように述べている。

「私の教師はパーク、バージェス、そしてルイス・ワースでした。そして後からはエヴァレット・ヒューズでした。しかし、最初に私が師事した人はロイド・ウォーナーでした。」（*ibid.*）

デュルケムに連なる自らの系譜を「ゴフマン～ウォーナー～ラドクリフ＝ブラウン～デュルケム」と明示しているゴフマンが、他方で、ジンメルに連なるはずの系譜を「ゴフマン～ヒューズ～パーク」で止めてしまっている。もっぱら著作を通して影響を受けたという点ではジンメルと同格のパークを、直接教授を受けたバージェスやワース、ヒューズと同列に「私の教師」と呼ぶゴフマンが、ここでもジンメルの名を挙げていない。自分のPh. D. 論文にエピグラフとしてジンメルの『社会学の根本問題』（英訳）から長い一節を引用しているゴフマンが、である。

要するに、状況証拠からいえば、ジンメル社会学の影響をゴフマンが多分に受けているはずなのに、ゴフマンは「ジンメル社会学の影響を受けている」と述べていないのである。筆者にはこれが「謎（enigma）」に思われる。この「謎」を解くために、筆者は本論において「ゴフマンは隠れジンメリアンだった」という仮説を提出する。すなわち、「一見してジンメル社会学の影響を受けていそうなゴフマンが、じつは、その見かけよりはるかに深く広範囲にジンメル社会学の影響を受けていたのではないか」という、ゴフマン社会学への新たな読解の視角である。こうした視角を採用することによって筆者が解明したいのは、「ゴフマン社会学に対するジンメル社会学の実質的な影響がどのようなものであったのか」ということである。

しかし、この「実質的」影響を探る作業は、事柄の性質上、ある種の困難を伴う。いうまでもなく、この作業が「一見してわかりにくい」関係を扱うことだからである。すなわち、引用や言及といった直接表面に現れている部分だけでなく、「痕跡」としてかすかに残っている部分や判別しにくい部分も含めて、ジンメル社会学とゴフマン社会学との関係の実態を探ろうということである。したがって、これを進めていくためには周囲から地歩を固める予備的作業が必要となる。まず、「ジンメル－ゴフマン関係」をめぐる代表的な研究の成果と問題点を押さえた上で、ゴフマンが実際に読んだジンメルの著作、そして読むことができたジンメルの著作を時系列的に確定して、ジンメル社会学の影響の局限化を避けていく（→2.）。次に、ゴフマンが先行理論を摂取する際に特徴的な様式を理解し、ゴフマンの著作に残されたジンメル社会学摂取の「痕跡」を探り出す（→3.）。そして最後に、ゴフマンの最初の公刊論文を取り上げて、ジンメル社会学がゴフマン社会学に与えた実質的な影響の一面を解明する（→4.）。

2.「ジンメル－ゴフマン」関係解明の前提作業

⑴従来の「ジンメルとゴフマン」研究の問題点

ジンメル社会学のゴフマン社会学への「影響」という論点を扱う場合、単純だが最も堅実な方法は、ゴフマン

の著作におけるジンメルからの引用と彼への言及を調べ上げていくことであろう。この作業を網羅的に行ったのがスミスのPh. D. 論文（Smith 1989a）である。そこには、ゴフマンの著作における引用を含むジンメルへの言及が全て列挙されている。

スミスによると、ゴフマンの著作におけるジンメルからの引用および言及は、最初の公刊論文（Goffman 1951）で（Simmel 1904）から１か所、Ph. D. 論文（Goffman 1953）でK・ウォルフによるジンメルの英訳選集（Wolff 1950）から７か所、最初の著書（Goffman 1959）で２か所、（Goffman 1961）で１か所、（Goffman 1963）で２か所、（Goffman 1967）所収の３論文で３か所、（Goffman 1971）で１か所、（Goffman 1974）で１か所の、計10編の著作で21か所である（Smith 1989a：210）。

これとは別の研究（Lenz 1991：58）によると、ゴフマンによるジンメルの引用数・言及数は８出版物24回で、先達の社会学者[1]では、デュルケムの12出版物29回に次いで多い。引用と言及の数からいえば、ゴフマンの著作におけるジンメルの比重はデュルケムのそれにほぼ匹敵するということである。

しかし「引用・言及の多さと影響の大きさとの間に正の相関関係がある」という法則は存在しない。ある社会学者Aへの言及を別の社会学者Bが数多く残しているとすれば、確かにその事実は、前者Aに対して後者Bが「一定の関心」を抱き、両者の間に「何らかの関係」が存在することを示唆するものではあるが、そこからそれ以上の結論を引き出すことはできない。

したがって、こうした「数量」関係の検討に加えて、引用箇所や言及内容の考察を通して、ジンメル社会学のどの面がゴフマン社会学のどの面にどのような影響を与えたのかという影響関係の内実に迫っていく必要がある。ゴフマンの著作におけるジンメルからの引用を詳細に調べたスミスは、引用「数」だけでなく、両理論の「内容」上の共通性に関して、４点にわたって指摘している（Smith 1989a：216-244）。それは、(a)「他者に関する知識と自己に関する情報」、(b)「演劇の役者と演出論」、(c)「冒険と行為」、(d)「ジェンダーの差異化」である。だが、この指摘の中には、当時まだ英訳されておらずゴフマンが読んでいなかったジンメルの著作[2]とゴフマン社会学との関係を論じているもの〔(b) と (d)〕が紛れ込んでいる。周到な文献探索をしているスミスにしては、何とも中途半端な論じ方である。これらの中で厳密な意味で「ジンメル社会学のゴフマン社会学への影響」といえるものは (a) だけで〔(c) も「影響」といえるが周辺的である〕、他は「ジンメル社会学とゴフマン社会学の類似性」の指摘でしかない。

理論上の「影響」を受けるためにはその著作を「読む」必要があるから、「影響」の有無を語る場合、ドイツ語で書かれたジンメルの著作の英語圏での翻訳状況も無視できない条件となる。この点をめぐっては、M・S・デイヴィスの次のような指摘がある。

「ゴフマンが熟知していたジンメルの著作は限定されていた。それは、E・ヒューズによってシカゴ大学の社会学科で伝えられてきた著作と1950年代にK・ウォルフによって翻訳された著作であった。」（Davis 1997：378）

デイヴィスのこの指摘は、ジンメルの著作の米国における英訳状況を考慮すべきだという重要な視点を提示している。これは、スミスの研究の弱点を補うものである。しかし、すぐ後で行う考察からわかるように、デイヴィスの事実認識は不正確であるため、結果的に「ジンメルとゴフマン」研究の方向性を誤らせるものになっている。そうした不正確な認識に基づきゴフマンにおけるジンメルの影響を過小評価し、上記のスミスとは異なる面から「ジンメル社会学とゴフマン社会学の類似性」を論じているが（*ibid.*：373-378）、結局は、両理論の指向性の対照性の指摘で終わっている（*ibid.*：379-385）。

スミスもデイヴィスも重要な視点を提出しながら、それらを徹底していないため、不十分な検証から誤った結論を導き出している。では、どうすればよいか。デイヴィスの視点は重要だが、ウォルフの英訳選集（1950年）以前にゴフマンがジンメルの著作を読んでいなかったことを彼は証明していない。この点に関しては、次のゲアハルトの指摘のほうが知的な誠実さを保っている。

「ゴフマンがシカゴ大学の大学院時代にジンメルの著作と出会っていたのか、それとも彼がPh. D. 論文のために収集したデータを分析しているときにウォルフの英訳選集に偶然出会ったのかは明らかではない。」（Gerhardt 2003：146）

したがって、この点に関しては結論を未決状態にしておき、あり得る可能性を残しながら、文献的に厳密な態度で探索を進めていくべきであろう。すなわち、この文献的な探索にはジンメルの著作の英訳状況の検討も含めるべきだということである。この視点が重要なのは、ジンメルの著作からの引用や彼への言及という外面的な関係だけからジンメルのゴフマンへの実質的な影響関係を判断するのは早計だと考えるからである。後述するように、先人への言及がない箇所であっても、彼らの発想や視点をゴフマンが取り入れていると思われる箇所が散見される。また、丹念な文献探索を行ったスミス自身が、

他方で「ゴフマンの場合、引用の存在は、ジンメルや他の人から重要な影響があったことの信頼できる目印にならない」(Smith 1989a：215）とも述べている。

そこで、次に行うべき作業は、ゴフマンが実際に読んだジンメルの著作（英訳）に加えて、彼が読んだ可能性のあるジンメルの著作（同）を時系列的に調べ上げていくことである。この作業によって、主としてデイヴィスの事実認識の誤りを訂正することができる。

⑵米国におけるジンメルの著作の英訳状況

先に「ゴフマンが熟知していたジンメルの著作は限定されていた」というデイヴィスの指摘を引用したが、この事実認識は三つの点で正しくない。

第一に、K・ウォルフによるジンメルの英訳選集の出版以前に比較的多くのジンメルの著作が個別に英訳されていたことをデイヴィスは全く無視している。米国社会学界におけるジンメルの翻訳状況とその影響の実態は、以下のようであった。

「A・スモールは、一八九五年に創刊した*American Journal of Sociology*にジンメルの社会学関係の多くの論文を英訳して掲載し、またジンメルの影響を強く受けたR・E・パークとE・W・バージェスがシカゴ大学において活躍し、この両名が編集した『社会学入門』は多くをジンメルの文章からとり、N・J・スパイクマンの『G・ジンメルの社会理論』とともによく読まれ、アメリカ社会学界に大きな影響をあたえた。」(居安　2000：146）

実際ウォルフの英訳選集の巻頭には、それ以前に英訳されたジンメルの全著作が時系列的に整理されている（Wolff 1950：lvii-lix)。このうち、ゴフマンが読んだことが確認できる著作［実線の下線］と読んだ可能性がある著作［破線の下線］を以下に列挙しておく(3)。

［01］"Fashion," *International Quarterly*, 10, No. 1, 130-155, October, 1904. Tr. not indicated.〔 →（Goffman 1948; 1951）でデュルケムによる集合的シンボルの統合機能論に対比してジンメルによるステイタス・シンボルの内集団的統合＝外集団的排除機能に言及〕

［02］"The Problem of Sociology," *ibid*., XV, No. 3, 289-320, November, 1909. Tr. Albion W. Small.〔←the 1st chapter in Simmel's *Soziologie*〕

［03］"How is Society Possible?" *ibid*., XVI, No. 3, 372-391, November, 1910. Tr. Albion W. Small.

［04］Robert E. Park and Ernest W. Burgess, *Introduction to the Science of Sociology*, Chicago：University of Chicago Press, 1921.
"Sociology of the Senses：Visual Interaction," pp. 356-361.〔→（Goffman 1963：93）でこの一節がそのまま引用されている〕

［05］"The Sociology of Secrecy and of Secret Societies," *ibid*. , XI, No. 4, 441-498, January, 1906. Tr. Albion W. Small.〔←the 5 th chapter in Simmel's *Soziologie*〕

［06］Nicholas J. Spykeman（ed. and tr.）, *The Social Theory of Georg Simmel,* Chicago：University of Chicago Press, 1925.〔＝ジンメルの社会学的著作からの英訳ダイジェスト版〕

1945年秋――ゴフマンが米国のシカゴ大学社会科学部大学院社会学科に入学した。

1946年秋――ゴフマンが修士論文のデータ収集のため、シカゴのハイド・パークに住み専門職の夫をもつ主婦50名に面接とTATを実施した。

1948年秋学期――ゴフマンがバージェス（Ernest W. Burgess）のセミナー・レポート（Goffman 1948）を提出した。〔ジンメルの［01］への初めての言及〕

［07］"The Sociology of Sociability," *The American Journal of Sociology,* LV, No. 3, 254-261, November, 1949. Tr. Everett C. Hughes.

1949年10月――ゴフマンがエディンバラ大学社会人類学科の助手になった。

1949年12月――ゴフマンがシカゴ大学に修士論文（Goffman 1949）を提出した。同月、シェトランド諸島の調査を開始した。

［08］Kurt H. Wolff（ed. and tr.）, *The Sociology of Georg Simmel,* New York：Free Press, 1950.

1951年５月――アンスト島での調査を終えたゴフマンがPh. D. 論文執筆のためにパリに移り住んだ。

1951年12月――セミナー・レポートを基にしたゴフマン初の公刊論文（Goffman 1951）が *The British Journal of Sociology*に掲載された。〔公式にジンメルの［01］に言及したゴフマン最初の論文〕

1952年11月――ゴフマンの二番目の公刊論文（Goffman 1952）が*Psychiatry*に掲載された。

1953年12月――ゴフマンがシカゴ大学にPh. D. 論文（Goffman 1953）を提出した。この論文の扉にジンメルから長い一節が引用されている。

ここにウォルフの英訳選集［08］以降のジンメル翻訳

書を加えると、以下のようなリストとなる。

［09］Kurt H. Wolff（ed. and tr.），*Georg Simmel: 1858-1918,* Columbus：Ohio State University Press, 1959.

1959年――ゴフマンの著書『自己呈示』（アンカー版）が出版された。
1961年――ゴフマンの著書『出会い』が出版された。〔frame概念の初出〕

［10］Kurt H. Wolff（ed. and tr.），*Essays on Sociology, Philosophy and Aesthetics,* New York：Harper & Row, 1965.〔→『フレーム分析』での引用は本書から〕

1967年――ゴフマンの著書『相互行為儀礼』が出版された。〔"The Adventure"への言及〕
1974年――ゴフマンの著書『フレーム分析』が出版された。

以上のリストから明らかなように、ゴフマンがシカゴ大学院に入った当初から、一定数のジンメルの著作が読もうと思えば読める状態にあった。この点に関して「読んでいた」証明は別途必要になるが、「読んでいた可能性がある」ことだけは確認しておこう。

第二に指摘すべき点は、上記の点とも関連するが、ゴフマンが実際に読んで引用している、［01］の論文「流行」［以下、「流行」論文］や、［04］を含む『社会学という科学への入門』［以下、『社会学入門』］所収のジンメルの英訳抜粋の存在を、デイヴィスは完全に見落としていることである[4]。特に、上記リスト筆頭［01］の「流行」論文は、ゴフマンが最初にジンメルに言及した著作であるというだけでなく、その後のゴフマン社会学の展開に重要な影響を与えた蓋然性があるだけに（後述）、この見落としは重大だといえる。また、［04］『社会学入門』に収められているジンメルからの英訳抜粋も少なからぬ影響をもたらした可能性がある。

第三に、仮に1950年刊のウォルフの英訳選集に限定したとしても、それを以て「ゴフマンが熟知していたジンメルの著作は限定されていた」とするデイヴィスの評価は正当でない。なぜなら、ウォルフの英訳選集は、ジンメルの二つの代表的な社会学の著作である『社会学の根本問題』（*Grundfragen der Soziologie*）の全編と『社会学』（*Soziologie*）の大半〔全十章中第一章・第二章・第三章・第五章・第八章の一部・第九章の一部〕が収められた、本文424ページの大部だからである。そこにスパイクマンによるジンメルの社会学的著作の英訳ダイジェスト版［06］を加えると、ジンメルの社会学理論の大まかな全容が理解できる文献的な環境にあったといえる。さらに、上述した当時の翻訳状況を考慮すれば、デイヴィスの評価の誤りは明白であろう。

以上を総合すると、先に引用したゲアハルトの未決問題は「ゴフマンが［1950年以前の］シカゴ大学の大学院時代にジンメルの著作と出会っていた」のほうが事実であると判定される。確認できる範囲に限っても、その時期は、彼の修士論文提出およびPh. D. 論文のフィールドワーク開始の時期（ともに1949年12月）よりも前の1948年の秋学期にまで遡る。しかも、「ジンメル社会学はゴフマンが大学院生だった1945年から1954年の間のシカゴ大学の知的環境の重要な一部を構成していた」（Smith 1989b：22）という当時の学問的な状況、および「ジンメルの翻訳を［自らの］学術的関心の一つ」（*ibid.*）にするヒューズ（Everett C. Hughes）の弟子[5]であったというゴフマンの人間関係の中に置いて考えると、この時期にジンメルへの言及があったことの意味は、見かけ以上に大きいのではないかと思われる。すなわち、デイヴィスの評価とは異なって、「ゴフマンがもっていたジンメル社会学の知識はかなりのもので、ジンメルから受けた影響も相当程度であった」可能性が出てくるということである[6]。ただ、現段階では、これは「可能性」であって、まだ「蓋然性」にはなっていない。

3．ゴフマンにおけるジンメル社会学の「痕跡」

⑴ゴフマンによる先行理論の「摂取」様式

先に、「ゴフマンの場合、引用の存在は、ジンメルや他の人から重要な影響があったことの信頼できる目印にならない」というスミスの主張を取り上げたが、彼はその根拠を挙げていない。しかし、この主張は間違っていないと思う。なぜなら、特定の人物名を挙げるべきところでゴフマンがそれを挙げないことが多々あるからである。例えば、彼のPh. D. 論文で採用され、のちの相互行為秩序論のキーワードになる「ユーフォリア／ディスフォリア」の出所は（Radcliffe-Brown 1952：212）であり、おそらくそれ以外にはないはずなにのに、以下のようなぼかした言い方［傍点の箇所］をしている。

> 「ユーフォリアとディスフォリアという用語は、社会システムがうまく機能している状態とうまく機能していない状態を指示する用語として、無文字社会の研究者たち（students of preliterate societies）が用いてきた。」（Goffman 1953：243）［下線は原著者、傍点は引用者］

また、『日常生活における自己呈示』（Goffman 1959）［以下、『自己呈示』］で述べられた「自己に関する情報」

における観察者の優位という「コミュニケーション過程での基本的な非対称性」（Goffman 1959： 9 ）に関して、ゴフマンはその発想の出所を明らかにしていない。直接的な出所として可能性が高いのは、ロイシュとベイトソンの共著（Ruesch & Bateson 1951）である。そこで指摘された精神分析状況の「非対称性」（*ibid.*：207）がゴフマンの別の著書に引き継がれているからである（Goffman 1963：15）。Ph. D. 論文でこの問題に初めて触れた際には、「非対称性」の議論を引き出すのに読み込みが必要なジンメルの一節を引用している（Goffman 1953： 81）。これと別の文脈にある「行為のルール」における「対称的／非対称的」関係の問題では、心理学者ザウレス（Robert H. Thouless）の名を挙げているが（Goffman 1967：52*n*）、初期ゴフマンが最も影響を受けた一人ラドクリフ＝ブラウンの、「非対称的」関係としての「冗談関係」（Radcliffe- Brown 1952：96）の議論に言及していないのは不自然である。このように、ゴフマンの著作では発想の出所の言及がなかったり、挙げるべき人物を挙げないことがよくある点に注目すべきある。

他の知的先達との関係について一例を挙げておこう。パークの「人種関係のサイクル」すなわち「競争→闘争→応化→同化」のうち「応化（accommodation）」を対面的相互行為場面に適用するとゴフマンの「作業上の合意」概念が導き出されるとの指摘（Jaworski 1997：37）があるが、実際、これを裏付ける次のような記述が彼のPh. D. 論文にみられる。しかし、発想の由来について彼は一切言及していない。

「相互行為自体を破壊しないよう如才のない仕方で矯正が適用されている間は、いかに一時的であっても、この応化的反応（this accommodative response）によって相互行為の維持が許容される。応化的行動（Accommodative behavior）は、他者の行動を適切なものとして明らかに受け入れるという形態をとり、それは作業上の受け入れ（a working acceptance）と呼び得るものを生じさせる。」（Goffman 1953：37）［傍点は引用者］

こうした事例は枚挙に暇がないので、これぐらいにしておく。いずれにせよ、ゴフマンが先人から用語や視角、発想を摂取する際、出典や出所を明示しないことが多々あり、「わかる人にはわかる」式の書き方をしているのは確かである。しかも、先達の用語を借用しながら、全く別の次元に適用したり、語義を拡張したり[7]、別のものに組み換えるといったゴフマン独特の摂取の仕方がみられる。こうした摂取様式もまた、スミスが「引用・言及」に関する詳細な文献研究をしつつ、他方で、それ以外の形でジンメル社会学がゴフマン社会学に与えた影響を捉え損なった原因の一つと考えられる。

⑵ゴフマンがジンメル社会学を摂取した「痕跡」

以上の背景的理解を“補助線”として、ゴフマンがジンメル社会学を摂取した「痕跡」を追っていこう。そうした「痕跡」は消えずに残っていると思われる。

ジンメル研究者の中には、引用などの直接的な言及の関係を超えたレベルで、ジンメル社会学からゴフマン社会学への継承があったと指摘する人がいる。例えば、ジンメルの「秘密と秘密結社」論とゴフマンの「自己呈示」論のつながりを示唆するものがそれある。

「同章［「秘密と秘密結社」］には『装身具についての補説』が挿入されている。秘密が自己を隠蔽するのに対し、装身具は自己を誇示するためのものである。それについても詳細は省くが、いずれにせよジンメルが、相互作用において人々が自己を他者にいかに呈示するかという問題に着目したことは画期的であり、のちに登場するＥ・ゴッフマンにそれが受け継がれることになる［ゴッフマン　二〇〇二[*]など］。」（杉本 2008：96-97）［（*）『儀礼としての相互行為』浅野敏夫訳、法政大学出版局を指す―引用者］

この主張が何に基づくかは述べられていないが、筆者は大筋でこれに同意する。ただ、この根拠づけにふさわしい著作は、『自己呈示』のほうだと考える。その理由は、スミスが指摘したジンメルへの言及のほかに、ジンメル社会学を摂取したと思われる「痕跡」が散見されるからである。その「痕跡」の一つが、『自己呈示』のキーワードである「チーム」が「秘密結社」に類似した性質をもっているという、ゴフマンの次の記述である。

「もしパフォーマンスを効果的なものにしようと思うなら、これを可能にしている共同作業の範囲と性格は隠蔽され、秘密にされたままであることが多い。したがって、チームは何ほどか秘密結社の性格をもっている。」（Goffman 1959：104）［傍点は引用者］

ここでは誰の名も挙げていないが、同じパラグラフには他に「秘密」の語が一回、「秘密結社」の語が二回登場する。この箇所以外にも、「秘密」ないし「秘密結社」の語は散見される（*ibid.*：64, 113, 149, 178, 193, 212, 213, 216）。そして、序言でのジンメルへの言及（*ibid.*：xii）と本文内での引用（*ibid.*：69）の他に、「形式社会学」の視角採用を表明している箇所（*ibid.*：10）や「秘密」をゴフマンが独自に類型化している箇所（*ibid.*：141-144）が確認できる。これらを総合すると、『自己呈

示』における重要な視角の一つとしてジンメルの「秘密と秘密結社」論をゴフマンが取り入れていた可能性は高い。「秘密」とは「情報コントロール」（*ibid.*：141）の一局面であり、「多くのパフォーマンスにとっての基本的な問題は情報コントロールの問題である」（*ibid.*）とすれば、ジンメル「秘密と秘密結社」論のゴフマン「自己呈示」論への継承という主張は間違っていない[8]。ヴェブレンの「顕示的消費」をもじってゴフマンが「秘密の消費」（*ibid.*：42）と造語していることも傍証となる。

いったんこのように「ゴフマンを隠れジンメリアンとして見る」というアスペクトが成立すると、ゴフマンがジンメル社会学を摂取した「痕跡」が次々に見出せる。例えば1956年の論文「表敬と品行の本性」では、ジンメルから引用している二か所（Goffman 1967：62-63, 65-66）のほかに、引用元の箇所（Wolff 1950：320, 321）の直後でジンメルが論じている社会的地位の「重要性」と「距離」との関係という視角をゴフマンはジンメルへの言及なしに「防衛的回避／表敬的回避」の議論に取り入れている（Goffman 1967：70）。一見してデュルケムとラドクリフ＝ブラウンの儀礼論の影響が目立つけれども、「地位」と「距離」との関係という視角は、次の引用の通り、ジンメル固有のものである。

「同じ形式のもう一つの球状体は、人格の『重要性』とよばれるものに対応する。『重要な』人物に関しては、距離を保つことへの内的な強迫が存在する。」（Wolff 1950：321）

また『公共の場の行動』（Goffman 1963a）には、ヒューズ訳の「名誉、道徳および法」とパーク＆バージェス『社会学入門』所収の「感覚の社会学」からの二か所の引用（Goffman 1963：24*n*, 93）のほかに、ジンメル社会学を摂取している「痕跡」が見出せる。それが、引用符付きの「知り合い関係（"acquaintanceship"）」（*ibid.*：112）である。もちろん「いわゆる」という含意で引用符を付けた可能性もあるけれども、「知り合い（acquaintance）」という社会関係は、ジンメルが「参加者の相互的な知識の度合いによる社会関係のタイプ」の独特な一タイプとして論じているものである（Wolff 1950：320）。

ゴフマン社会学の骨格が示されたPh. D. 論文ではエピグラフにジンメルの『社会学の根本問題』から長い一節が引用され、しかも同論文におけるジンメルからの引用はゴフマンの全著作におけるそれの三分の一を占め、最多である。このように、未公刊のPh. D. 論文では半ばジンメリアンであることを表明している一方で、公刊された著作では断片的な引用という形に止めている。こうした落差を併せてみると、「ジンメル社会学を相当参照しているのが実態なのに、表面上ゴフマンはそのように書いていない」という印象は、さらに強くなる。その傍証として、彼が「隠れジンメリアン」であることを正直に語っているようにみえる箇所を挙げておく[9]。

「勝手にジンメルの文章から借用して（with apologies to Simmel）、日常生活における順番取りの本質的性格は、一方の、抑えられた状態にある財産と契約の権利主張と、他方の、社会的ランクの権利主張との中間的な根拠であるということもできるだろう。」（Goffman 1971：36*n*）［傍点は引用者］

4．ゴフマン社会学へのジンメル社会学の実質的影響：「流行」論文を中心に

以上の検討作業から「ゴフマンは隠れジンメリアンであった」という仮説が導き出されるとしよう。この仮説に基づいて、ジンメル社会学がゴフマン社会学に与えた実質的影響を検討する。ここで取り上げるのは、ゴフマンの著作を精査したスミスが拾い上げつつも注目しなかったジンメルの「流行」論文（Simmel 1904）である。なぜこの論文に注目するかというと、本論文が、従来の理解とは異なる側面で、また見かけ以上に強く、ゴフマン社会学に影響を与えたと考えられるからである。

この「流行」論文は、その後のゴフマン社会学の展開に二点で影響を及ぼしたと推測される。（1）シンボルの読解を通した「内集団」成員間の連帯と「外集団」成員の排除という基本構図と、（2）「フレーム」がもつ二重の機能、である。ゴフマンは（1）に関しては「階級」論文で述べているが、（2）に関して同論文では全く触れていない。ジンメルの「流行」論文において「フレーム〔額縁〕」は階級シンボルがもつ集団的機能の隠喩の扱いでしかないが、筆者は、ジンメルの「フレーム」に対する捉え方がゴフマンにおいて相互行為秩序を析出する重要な分析装置になったのではないかと考えている。「流行」論文の当該箇所を引用しておく。

「流行は階級区別の産物であり、他の多数の形式、特に名誉と同様に、二重の機能を果たす。（……）ちょうど絵画のフレーム（the frame of a picture）が芸術作品をその内側に向かっては統一性があり均質で独立した存在態として特徴づけると同時にその外側に向かっては周囲の空間との直接的な関係をすべて断ち切る（……）。（……）このように、流行は一方で同じ階級にある人びととの結合、同じ階級によって特徴づけられた仲間集団の均一性を意味し、他方でまさにそのことによって、他の全ての集団の排除を意味する。」

（Simmel 1904：133-134）［傍点は引用者］

⑴「内集団の連帯と集団間の差別・排除」の構図

「流行」論文の主旨は、階級的に「上」に属することを表示するシンボルとして「流行」があり、それをいち早く取り入れた人々が「同じ階級仲間」と見なされ、まだ取り入れていない「下の階級の人々」との差別化を図っているということである。ゴフマンは「階級」論文で「流行」論のこの構図を取り入れ、立ち居振る舞いも含めた「ステイタス・シンボル」を主題に論じている。

「それ［階級所属を示すシンボル］は、他の人にその人物の一般的な振る舞い方が適切で好ましいという印象をもたせる種類の行為から構成される。居合わせる人たちの中にあって、そのような人物は『自分たちと同類だ』と見なされる。」（Goffman 1951：300）

そして、この「ステイタス・シンボル」の集団的機能がデュルケムの「集合的シンボル」のそれとは明確に異なることをゴフマンは明記している。

「ステイタス・シンボルは、社会的世界を、人に関する諸カテゴリーに明瞭に分割し、それによって、同一のカテゴリー内では連帯を、異なるカテゴリー間では敵意を維持するのに役立っている。それゆえ、ステイタス・シンボルは、集合的シンボル〔＝デュルケムの概念〕と区別されなければならない。なぜなら、集合的シンボルは、カテゴリー間の差異を否定し、あらゆるカテゴリーの成員を、単一の精神的共同体に属するという確証の中に引き込むのに役立つものだからである。」（Goffman 1951：294-295）

R・コリンズの指摘以来「デュルケミアンとしての初期ゴフマン」という像が喧伝されてきたが、少なくとも「階級」論文では「ジンメリアンとしての初期ゴフマン」のほうがふさわしい。そして、ジンメルから摂取したこの基本的な構図がその後のゴフマンの相互行為秩序論に引き継がれていったのではないかと筆者は想定する。この点に関連して、ジンメルに固有の「二重に構造化される（double-structured）」という発想法をゴフマンが受け継いでいるとする指摘がある。

「社会化の形式をまねた相互行為の形式が秩序を生み出すと同時に闘争も生み出すことをゴフマンは理解している。相互行為の結果には、所属することの安心だけでなく、排除されることの恐怖も含まれる。／ゴフマンは、そのように二重に構造化される現実というものを公準と見なす点だけでなく、システマティックな呈示のスタイルを発展させた点でも、ジンメルに従っている。」（Gerhardt 2003：152-153）［傍点は引用者］

「階級」論文でゴフマンは対面的相互行為における微細な記号の読解を通した「内集団の連帯と外集団の差別・排除」という構図をジンメルから引き継いだと思われるが、この構図と、『公共の場の行動』で展開された集団構造化の構図、すなわち「エチケット」の適切な遂行能力の有無が「集りの成員〔＝まともな人〕／「集りの非成員〔＝まともでない人〕」を識別し、後者を差別・排除するという構図とは類似している。次の引用は「まともな市民」の「成員資格（membership）」を表示することの重要性を論じている箇所である。この構図は、階級シンボルの表示により階級の成員資格を証明するという構図によく似ている。

「家族やクラブに属している以上に、階級や性別に属している以上に、そして国家に属している以上に、個人は集りに属しているのであり、会費を完全に払い込んだその優良会員であることを示すことに越したことはない。」（Goffman 1963a：248）

ここで、ゴフマンはジンメルの「サークル」という単位を「集り」に移し替え、その“凝集剤”たる「サークルの一員」としての「名誉」を「集り」の“凝集剤”たる「まともな市民の一員」としての「自尊心」に読み替えていったと思われる（小原 2001：57-58）。

この事例から敷衍していえば、ゴフマンが先人の理論・概念の取り入れる際に行っている改変の特徴として、まず「ミニチュア化」を挙げることができる。ジンメルの「内集団の連帯と外集団の差別・排除」という大状況の構図をゴフマンは対面的相互行為場面という小状況に適用している。「サークル」から「集り」へ単位の視点移動も、ミニチュア化に該当する。ラドクリフ＝ブラウンがマクロな社会システムの水準で用いた対概念「ユーフォリア／ディスフォリア」をゴフマンは対面的相互行為の状態記述に用いているし、デュルケムの「アノミー」を「対面的相互行為の小さなシステム」の機能不全として記述している（Goffman 1959：12）、等々。

ゴフマンの先行理論「摂取」法を特徴づける言葉として次に挙げられるのが「プロセス化」である。「内集団の連帯と外集団の差別・排除」の構図をミニチュア化するだけでなく、プロセス化していけば、対面的相互行為への「公式の参加者／非公式の参加者」（Goffman 1953：137-138）の成員境界の議論や、対面的相互行為

への「専念（involvement）／疎外」など一時的で変動しやすい「参与／非参与」というゴフマン固有の問題設定にも近づいてくる。そのように考えることができるとすれば、ジンメル社会学がゴフマン社会学に与えた影響は、予想以上に大きいことになる（薄井 2012：11）。

もちろん、ゴフマン相互行為秩序論に対するジンメル社会学の影響を「流行」論文だけから理解するのは正当ではない。ほかに例えば、明らかに影響の「痕跡」がみられる「秘密と秘密結社」論でも「包含／排除」の問題は論じられているからである。

「一方にあるのは、明示的に排除されていない人はみな包含される〔＝同類に数えられる〕という原理である。他方にあるのは、明示的に包含されていない人〔＝同類に数えられない人〕はみな排除されるという原理である。」（Wolff 1950：369）

「『公共の場』とはそのコミュニティの成員が自由に出入り区域を指すのに対して、『私的な場』とは成員または招待客だけが集まる、防音が施された区域を指す。」（Goffman 1963a： 9 ）

いずれにせよ、ジンメル社会学がゴフマン社会学に持続的に影響を与え、前者は後者の“通奏低音”となしているという仮説は、この集団構造化の基本構図という面では、一定の妥当性があるとはいえるだろう。

⑵「フレーム」概念の借用と展開

他方の「フレーム」概念は、すでに述べたように、ジンメルの「流行」論文では、集団に対して階級シンボルがもつ内的－外的な二重の機能を理解しやすくするための隠喩として扱われている。しかし筆者は、この「フレーム〔額縁〕」の働きに着目したと思われるゴフマンがこれを相互行為秩序の主要な分析概念に昇格させたのではないかと推測している。

「フレーム」が分析概念としてゴフマンの著作に初めて登場するは『出会い』（Goffman 1961）所収の論文「ゲームの面白さ」［以下、「ゲーム」論文］である。その脚注でベイトソンの論文「遊びとファンタジーの理論」（1955年）［以下、「遊び」論文］に言及しており、その点からいえばゴフマンの「フレーム」概念の出所はベイトソンだと見なしても間違いではない。だが、筆者はもう一つの可能性、すなわち「遊び」論文以前に、そしてそれとは別にゴフマンがジンメルから「フレーム」の考え方を取り入れていた可能性を想定している。その根拠の一つとして、ゴフマンのPh. D. 論文（1953年）で、「フレーム」の語こそみえないが、「状況の定義」の問題が扱われ（Goffman 1953：96, 106, 141, 176, 302, 303, 319）、対面的相互行為における“失策”に際し救済的な戦略として「状況のまじめでない定義」が導入されること（*ibid.*：337）が例示されるなど、実質的に「フレーム」の議論が展開されていることが挙げられる。こうした準備状態にあったゴフマンは「ゲーム」論文で「フレーム」概念を採用し、その後も持続的にジンメル社会学〔美学理論も含む〕の影響を受けながら「フレーム」概念について考察を深めていき、『フレーム分析』（Goffman 1974）に結実させたというストーリーが可能ではないかということである。

このストーリーの、別の裏付けとして、ジンメルの美学理論で「フレーム〔額縁〕」は重要な概念であり、それを主題にした「絵画のフレーム：一つの美学的研究」（Simmel 1994）の存在が挙げられる。またゴフマンが『フレーム分析』で一度だけジンメルを引用している箇所がエッセー「把手」の冒頭部分で、そこには「フレーム」概念と実質的に同内容の記述が見出せる（Goffman 1974：249*n*）。ジンメルのエッセー「絵画のフレーム」ではこの問題が少し詳しく論じられているが、ゴフマンがこれを読んだ事実は現時点では確認できない。仮にこの文献を除外しても、『フレーム分析』公刊以前にジンメルの「把手」をゴフマンが読んでいたのは事実であり、その時期として上記リストの［10］の1965年以降が候補になる[10]。ゴフマンがこの論文を読んでいたさらに早い時期として［09］の1959年に遡る可能性がある。彼が［09］を読んだのは確実だから、『出会い』の「ゲーム」論文で「フレーム」概念を採用する際にジンメルの影響があった可能性はにわかに高くなる。

なぜ「フレーム」概念のジンメル由来説に拘るかというと、まずそれは、『フレーム分析』の議論が後期ゴフマンに急に現れてきたものではなく、最初期ゴフマンに懐胎し、その後も彼の中で成長し続けた議論であるという理解につながるからである〔ゴフマン社会学の「一貫性」説〕。「遊び」論文（1955年）への言及も十分早期であるが、この一論文の影響だけでゴフマンが20年の歳月をかけ600頁弱の大著『フレーム分析』を書き上げたとするストーリーには無理がある[11]。むしろ「ステイタス」レポート（1948年）の執筆過程でジンメルの「フレーム」概念にインスパイアされたゴフマンが、以降もジンメル社会学〔美学理論も含む〕の影響を持続的に受けて「ゲーム」論文を書き、その後さらに議論を深めていった成果を『フレーム分析』にまとめ上げたとするストーリーのほうが無理がない。このストーリーは、ゴフマンの相互行為秩序論がPh. D. 論文（1953年）でほぼ出来上がっていることとも整合的である。

筆者が「フレーム」概念のジンメル由来説に拘るもう

一つの理由は、この仮説によって、ある疑問に答えが与えられるからである。その疑問とは、なぜゴフマンが『自己呈示』（1956年・1959年）で論考対象に「建物ないし施設の物理的な境界の内部で組織される種類の社会生活」（Goffman 1956：pref. ;1959：xi）という限定を付けたのか、である。この限定はPh. D. 論文の「仕切られた区域」（Goffman 1953：115）にまで遡る。筆者には、ゴフマンによるこの限定が長い間どうも腑に落ちなかった。確かに「屋内の社会生活」（Goffman 1959：238）を送るという近代西欧社会の文化的特殊性を述べようとしているとも考えられるし、単純に『自己呈示』で採用された視角が「劇場のパフォーマンス」であったからだと考えることもできる。しかし、問題はそうした物理的な側面ではないと思う。基本的に四本の枠木から構成される「フレーム」を立体化すれば四面の壁で仕切られた「仕切られた区域」となるが、問題は、「フレーム」が「絵画の内部空間」を定義する抽象的な機能をもつのと同様に、「部屋を仕切る壁」が「施設の内部空間の状況」を定義する抽象的な機能をもつということではないか。

「社会的施設の壁の内側に、オーディエンスに対して一定の状況の定義を協力して呈示しているパフォーマーのチームを私たちは見出す。」（Goffman 1959：238）［傍点は引用者］

こうした文献的な裏付けの作業抜きに、「流行」の二重の構造化作用と「フレーム」の二重の構造化作用の同型性を指摘する研究者もいるが（下の引用）、前掲の引用をみれば、ジンメルの中では両者がほぼ同じ「形式」として捉えられていたことは明らかである。

「ジンメルが克明に述べた流行の二重作用（模倣〔imitation〕と境界画定〔demarcation〕）は興味深いものであるが、これは、のちにゲシュタルト心理学者が実験知覚心理学的に発見した、画面上の輪郭線による境界画定と輪郭線内にみられる凝集効果とに、異質同型的に対応する現象である。」（宇野 1990：114）

しかし、ジンメルにおける（1）シンボルによる集団の二重構造化と（2）「フレーム」の二重構造化とは、ゴフマン相互行為秩序論においては「異質同型的」というより「異質同型的」な位置づけにあるように思われる。例えば『公共の場の行動』では、（1）は「集り」、（2）は「状況」として概念化されているのではないか。

「集りという用語は、その瞬間に互いに直に居合わせている人たち全員をその成員として含み、かつ彼らだけをその成員として含んでいる二人以上の集合（any set）を指すものとする。状況という用語は、そこに入ってきた人物が、そこに居合わせている（または居合わせることになる）当の集りの一成員となるような空間的環境全体を指すものとする。」（Goffman 1963：18）

喩えていえば、「集り」に概念化されるものは境界内にその要素（its member）としての人々を包含した「集合（a set）」に近いイメージ、「状況」に概念化されるものはその集合に包含される要素がもつべき性質の定義である「内包」に近いイメージである。この喩えが適切でないとしても、（1）と（2）とは密接に関連しつつも峻別されるべき位相であることは確かであろう。（1）の位相は「承認されていない参加者たち」を排除しつつ「承認された参加者たち」を包含した人びとの集合を指し、（2）の位相は「承認された参加者たち」の間で展開される「公然とした会話（＝支配的コミュニケーション）」という定義された活動を指す[12]。こうしたゴフマン社会学の整理・理解はジンメルを経由しなくても可能だが、ジンメル社会学を迂回することによって、より整合的でクリアな理解と整理が導き出せるのではないだろうか。

5．結びに代えて

以上、「ゴフマンは隠れジンメリアンだった」という仮説を立て、一定の論証を試みた。そして、その仮説に基づいて、「ゴフマン社会学に対するジンメル社会学の実質的影響」の一側面をみてきた。本論は、あくまでジンメルの「流行」論文を中心とした考察である。「ゴフマン社会学に対するジンメル社会学の実質的影響」をめぐってはほかに、本論でも簡単に触れたジンメルの「秘密と秘密結社」論と特に初期ゴフマンの著作との関係、ゴフマンの他者認識論における「範疇的／個人的同定」（Goffman 1983：3 - 4）とジンメルの論文「社会はいかにして可能か」との関係、ジンメルの「感覚の社会学」とゴフマンの「互いに直に居合わせた状況で（in each other's immediate presence）」という設定との関係、ジンメルの「交換」論および「感謝」論とゴフマンの「交互行為（interchange）」論の関係など、数多くの論点が存在する。加えて、ジンメル社会学のゴフマンへの持続的な影響を考える上で、師ヒューズ（Everett C. Hughes）との関係も考慮しなければならない。

時間は多少かかるだろうけれども、これらの論点が解明されれば「隠れジンメリアンとしてのゴフマン」という像は単なる「仮説」から「定説」になるかもしれない。しかし、かりにそれが成就しても、ゴフマン社会学の解

明作業の半分でしかない。「ジンメリアンとしてのゴフマン」と規定するだけではゴフマンが嫌ったレイベリングにとどまり、一種の還元主義に終わるからである。ジンメル研究で有名なジャウォスキー（G. D. Jaworski）は、この点に関して、適切な研究指針を提示している。

「実際は他の人によって明確化された洞察や概念区分の発見を研究者がゴフマンに帰すことがあるが、この場合ゴフマンは過大評価されている。適切な文脈的分析がなされていないためにゴフマンの実際の［社会学理論への］貢献が未発見のまま放置されていることがあるが、この場合ゴフマンは過小評価されている。ゴフマンを［理論的系譜の］文脈の中で検討すれば、彼がいかに先人に恩恵を被っているかがわかる。しかし、それによってまた、いかに彼が先人を乗り越えているかがわかるのでもあるが。」（Jaworski 1997：41）

ゴフマンが「いかに先人に恩恵を被っているか」がわかれば、ゴフマンに対する過大評価は消えてゆく。だが、それがわかったからといって、コリンズが意地悪く述べたように「実際以上に独創的にみえるようにうまくやってのけた」ことが発覚してゴフマン社会学の理論的な独自性が消え去ってしまうということはない。ジンメルに限らず、先人の理論や概念をゴフマンが摂取するとき、彼独自の改変・読み替え・組み換えによって我がものとしている。その意味で、ゴフマンは単なるジンメリアンでも、単なるデュルケミアンでも、単なるラドクリフ＝ブラウニアンでも、はたまた単なるヒュージアンでもない。そして、先人を単に真似るのではなく、「先人を乗り越えて」ゆくゴフマンのその創造的営為が、同時に、「いかに彼が先人に恩恵を被っているか」をわかりにくくしている要因でもある。一種“閉じた循環構造”のようにも思えるが、「わかりにくい」のであって「わからない」わけではない。ある面で「先人の恩恵」が解明できれば、その分だけ、もう一面で「ゴフマンの創造性」がわかり、それがゴフマン独自の摂取様式＝ゴフマネスクの特徴として蓄積されて、さらに別の面での「先人の恩恵」探しに役立つだろう。いずれにせよ、「ゴフマンは隠れジンメリアンだったのではないか」という「見込み」が、「見込み外れ」に終わるか、それとも「見込み通り」になるかは、ある程度の見取り図を描きつつ、それに沿ってその“物証”となるわずかな「痕跡」も見逃さず地道な“捜査”を続けていった結果としてしか、判明しないことだけは確かである。

［注］

（1）社会学者ではサックス（H. Sacks）が7出版物34回、シェグロフ（E. Schegloff）が4出版物25回と多いが、ゴフマンの知的先達ではないので、デュルケムやジンメルとは意味合いが異なる。また、ベイトソン（G. Bateson）も8出版物30回と数は多いが、その影響は限定的であったと考えられる。

（2）この場合、「ゴフマンはドイツ語が読めたか」ということが問題になる。彼の世代でドイツ語やフランス語を自由に読める語学力をもっていた者はごく少数だったという彼の発言（Verhoeven［1993］2000：219-220）や、引用文献においてドイツ語文献が皆無である点〔Ph. D. 論文で1文献のみ〕などを考えあわせると、ゴフマンはドイツ語で書かれた著作を自由に読むことができなかったと判断すべきであろう。

（3）誌面の関係上割愛したが、1950年より前に限っても、米国の雑誌等で英訳されたジンメルの著作は少なくとも他に10編ある（Wolff 1950：lvii-lix）。

（4）スミスは、この二つの文献をきちんと列挙している（Smith 1989：210）。しかし、その影響について彼は全く論じていない。

（5）ゴフマンがいつからヒューズに師事したかは明確になっていない。シカゴ大学入学当初からではないようだ。ゴフマンが1947-48年ヒューズのセミナーに参加したことはわかっているから、この時期以降であることは確かであろう。

（6）ゴフマンは、彼のシカゴ大学時代に英語で読めたデュルケムの文献は『宗教生活の原初形態』のみあったと述べている箇所で、ジンメルの英訳文献はパークとバージェスの何本かの翻訳など少なかったが、ウォルフの英訳選集以降徐々に増えていったと回顧している（Verhoeven［1993］2000：219-220）。実際のところ、ゴフマンはこのほかにジンメルの「流行」論文やヒューズの翻訳を読んで言及しているので、ゴフマンの回顧内容の正確さには疑問がある。いずれにせよ、こうした文献状況でもデュルケムの影響が強かったという立論が成り立つなら、ジンメルの影響が強かったという立論も成り立つはずである。

（7）このタイプの摂取の例として「この［敬意の］定義はラドクリフ＝ブラウンに従っているが、ただし、私は彼の用語に他の種類の配慮［の意味］を含ませて用いてきた」（Goffman 1967：57*n*）といった箇所を挙げることができる。

（8）ちなみに、「情報コントロール」という語句は『スティグマ』の第2章のタイトルの一部になっている（Goffman［1963b］1968：41）。

（9）こうしたアスペクトで見てみると、最晩年ゴフマンのASA会長就任演説（Goffman 1983）の最後のパラグラフに出てくる「私自身としては、人間の社会生活は自然主義的に、永遠の相の下に研究してこそ我がものとなると信じている」（Goffman 1983：17）の「永遠の相の下に（*sub specie aeternitatis*）も、ジンメルが雑誌*Der Jugend*に寄稿した連載記事「永遠の相の下でのスナップショット」（Momentp bilder *sub specie aeternitatis*）に由来するのではないかと思えてくる。

（10）こうした時期の想定は、『フレーム分析』の準備に約十年を要したというゴフマンの発言（Goffman 1974：vii）と符合する。

（11）筆者が「フレーム」概念の出所をベイトソンにしてしまうことに躊躇している理由の一つに、『フレーム分析』においてゴフマン自身がベイトソンの用法とは微妙に異なるといったニュアンスの発言を残していることがある（Goffman 1974：７）。

（12）ちなみに、この議論はPh. D. 論文では「公式の参加者／非公式の参加者」（Goffman 1953：137-138）の成員境界の議論としてすでに定式化されている。

［文献］

Collins, Randall, 1986, "The Passing of Intellectual Generations：Reflections on the Death of Erving Goffman, *Sociological Theory* 4, 1 : 106-113.

Davis, Murray S., 1997, "Georg Simmel and Erving Goffman：Legitimators of the Sociological Investigation of Human Experience," *Qualitive Sociology* 20, 3 : 369-388.

Gerhardt, Uta, 2003, "Of Kindred Spirit：Erving Goffman's Oeuvre and Its Relationship to Georg Simmel," in A. Javier Treviño (ed.), *Goffman's Legacy*, Rowman & Littlefield Publishers.

Goffman, Erving, 1948, "The Role of Status Symbol in Social Organization," in Dmitri N. Shalin (ed.), *The Erving Goffman Archives*. (http://cdclv. unlv. edu//ega/)

――――――, 1949, "Some Characteristics of Response to Depicted Experience," unpublished M. A. thesis, Department of Sociology, University of Chicago, in Dmitri N. Shalin (ed.), *The Erving Goffman Archives*. (http:// cdclv. unlv. edu//ega/)

――――――, 1951, "Symbols of Class Status," *The British Journal of Sociology* 2, 4 ：294-304.

――――――, 1952, "On Cooling the Mark Out : Some Aspects of Adaptation to Failure," *Psychiatry: Journal for the Study of Interpersonal Processes* 18, 3 : 213-31.

――――――, 1953, "Communication Conduct in an Island Community," unpublished Ph. D. dissertation, Department of Sociology, University of Chicago, in Dmitri N. Shalin (ed.), *The Erving Goffman Archives*. (http:// cdclv. unlv. edu//ega/)

――――――, 1959, *The Presentation of Self in Everyday Life*, Doubleday Anchor.

――――――, 1961, Encounters：*Two Studies in the Sociology of Interaction*, The Bobbs-Merril.

――――――, 1963a, *Behavior in Public Places: Notes on the Social Organization of Gatherings*, The Free Press.

――――――, [1963b] 1968, *Stigma: Notes on the Management of Spoiled Identity,* Penguin Books.

――――――, 1967, *Interaction Ritual: Essays on Face-to-face Behavior*, Doubleday Anchor.

――――――, 1971, *Relations in Public: Microstudies of the Public* Order, Basic Books.

――――――, 1974, *Frame Analysis: An Essay on the Organization of Experience*, Harper & Row.

――――――, 1981a, *Forms of Talk*, University of Pennsylvania Press.

――――――, [1981b] 2000, "A Reply to Denzin and Keller," in G. Fine & G. Smith (eds.), *Erving Goffman* [4], Sage.

――――――, 1983, "The Interaction Order," *The American Sociological Review* 48 : 1-17.

居安 正, 2000,『ゲオルク・ジンメル―現代分化社会における個人と社会―』東信堂.

Jaworski, Gary D., 1997, *Georg Simmel and the American prospect*, State University of New York Press.

Lenz, Karl, 1991, "Erving Goffman : Werk und Rezeption," in Robert Hettlage and Karl Lenz (eds.) *Erving Goffman―ein sociologischer Klassiker der zweiten Generation*, Paul Haupt.

野田浩資, 2003,「ヒューズによる『シカゴ学派の伝統』の継承と伝達」, 中野正大・宝月 誠編『シカゴ学派の社会学』世界思想社.

小原一馬, 2001,「『純粋さ』という戦略―ブルデュー、ヴェブレン、ゴフマンの理論を中心に―」, 京都大学大学院教育学研究科博士論文.

Park, Robert E. and Burgess, Ernest W., [1921] 1924, *Introduction to the Science of Sociology,* University of Chicago Press.

Simmel, Georg, 1904, "Fashion," *International Quarterly* 10：130-55.（＝1974, 丸子修平 訳「流行」,『ジンメル著作集７』白水社.）

――――――, 1994, "The Picture Frame : An Aesthetic Study," *Theory, Culture & Society* 11 (1) : 11-17. （＝1999, 北川東子・鈴木 直 訳『ジンメル・コレクション』筑摩書房.）

Smith, Gregory W. H. , 1989a, "A Simmelian Reading of Goffman," unpublished Ph. D. dissertation, Department of Sociology and Anthropology, University of Salford. (http://usir. salford. ac. uk/14705/1/ D092734. pdf)

――――――――――――, 1989b, "Snapshots 'sub specie aeternitatis' : Simmel, Goffman and formal sociology," *Human Studies* 12 : 19-57.

――――――――――――, 2006, *Erving Goffman*, Routledge.

杉本 学, 2008,「『社会学』―社会学的アイデアの宝庫」, 早川洋行･菅野仁『ジンメル社会学を学ぶ人のために』世界思想社.

薄井　明, 2012,「社会階級論の磁場の中のゴフマン社会学―彼の最初の公刊論文（1951）をめぐる一考察―」,『北海道医療大学看護福祉学部紀要』第19号.

Verhoeven, Jef C. , [1993] 2000, "An Interview with Erving Goffman, 1980," in G. Fine & G. Smith (eds.), *Erving Goffman* [1], Sage.

Wolff, Kurt H. , 1950, *The Sociology of Georg Simmel,* The Free Press.

Was Erving Goffman a secret Simmelian? : Another Simmelian Reading of Goffman

Akira USUI*

Abstract : Erving Goffman candidly admitted in an interview very late in his life that Émile Durkheim and A. R. Radcliffe-Brown were among his main influences, whereas he kept a silence on the point of the influence of Georg Simmel. I regard his silence about Simmel as an "enigma" because Goffman quoted a lengthy passage from Simmel's sociological work as the epigraph of his Ph. D. dissertaiton, or had made as many quotations from Simmel as from Durkheim. In order to resolve the enigma, I propose and confirm a hypothesis that Goffman was a secret Simmelian, that is, his theory on the interaction order was much more deeply and extensibely influenced by Simmelian sociology than it looked. On this hypothesis, I take up his first published article and make clear how Simmel's work had really influneced Goffmanian sociology.

Key Words : Goffmanian sociology, Simmelian sociology, secret Simmelian

* Center for Development in Higher Education